

吉村 昭著 間宮林蔵

八柳修之



「4千万歩の男 伊能忠敬」(井上ひさし)を読んで、忠敬と間宮林蔵との接点があることを知り、林蔵について知りたくなった。樺太は島なのか、大陸の一部なのかを確かめ、間宮海峡を発見した人という常識的な知識しか持たない私にとっては、情熱に燃える探検家、測量家、海外事情に通じた役人として苦労し生きた林蔵の姿を描いた吉村昭の「間宮林蔵」(講談社文庫)は読みごたえがあった。また、吉村の小説のもととなった林蔵が表した「東韃(とうたつ) 地方紀行」(東洋文庫)には、林蔵が見聞きした事や風景、風物の絵画が多数掲載されており、単なる探検家ではなかったことが伺い知ることが出来ます。

1780年(安永9):常陸国筑波郡上平柳の百姓、間宮庄兵衛・クマの10年目にできた子であった。利発な子で9才から村の専称寺の住職から四書五経、算術を学び非凡な才能があった。

1790年(寛政2):10歳。林蔵の運命を決定づける事があった。小貝川の灌漑用水工事を見学した林蔵は幕府の普請役に子供ながら意見を具申した。関心したこの普請役がのち林蔵の師となる村上島之丞に伝え、村上はわざわざ江戸から上平柳までやって来て弟子入りを勧めた。以後、村上の弟子となり行動を共にした。

1798年(寛政10):近藤重蔵、最上徳内とが千島列島、択捉島を探検し、同地に「大日本恵土呂府」の木柱を立てる。



1799年(寛政11):19歳。村上のお供で、蝦夷地に渡る。この頃、ロシアと対立して北海周辺で紛争を繰り返していた日本は北海への関心を高め、測量や地図の作成が急務であった。

1800年(寛政12):20歳:4月、伊能忠敬、蝦夷地を測量し9月箱館に戻る。この時、村上を訪ねて来た55歳の伊能に会う。伊能の情熱、測量術、測量道具は師の村上よりも進んだものであること知る。普請方に任ぜられた林蔵は、村上と共に植林の仕事に専念するが、林蔵は極寒により健康を損ね職を辞す。療養中、箱館の宿の主人から

蝦夷地で生き抜くためには、食事は魚や昆布など、防寒具は鹿、狐、犬などの毛皮、厳冬期は家にこもり身体の消耗防ぐ、要するにアイヌと同じの生活をしてアイヌ語を覚えることを勧めた。

翌、1801年(享和元):世は風雲急を告げ、忠敬が伊豆など諸国の沿岸測量を命ぜられたことを知る。

1803年(享和3):24歳、師村上が箱館にいることを耳にし訪問。林蔵が艶々とした顔をしているのに驚き、これまでの生活を話すと、「自分もアイヌの生活をするようにしている。その地に生きる人間を理解することでも」とアイヌの風俗、習慣を絵にしているのを見せてくれた。林蔵は単なる測量士ではない師の姿に感動。復職しないかと言われ、即快諾。蝦夷地御用雇に任ぜられる。

樺太については、寛政4年(1792)に最上徳内。9年後の享和元年(1801)に高橋次太夫が、それぞれ派遣されたが、その調査は南部にとどまっていた。幕府はロシア艦エトロフ島来攻以来、重要性を増す蝦夷地を松前藩に委ねておくことに強い不安を感じ、文化4年(1807)3月、幕府の直轄地とし、奉行所を松前に置いた。

1808年(文化5年)4月、間宮林蔵(29歳)は幕府の命により松田伝十郎に従って樺太を探索することになった。松田は幕吏の中でも最も蝦夷地に通じ、エトロフ島での越冬経験があり、アイヌ語にも通じ、豪胆

で思慮深い男であった。林蔵は樺太南端のシラヌシ（白主）で19年間も番人をしてきた万四郎という男を従者として雇い、装備を整えた。その中には伊能忠敬から譲られた羅針盤2個もあった。松田は西海岸から、ら北上することになった。林蔵は樺太が東韃靼（だったん）の半島か、または島かを見定めるには西海岸を行きたかったが上司である松田の言葉に従うしかなかった。ともあれ6月20日、ノテトというギリヤーク人の部落で松田と合流した。聞くと、松田はこれより先のラッカという地点まで行っており、林蔵もラッカへ行きたいと希望した。「潮が引いて干潟になっていて、対岸に東韃靼の陸地が見え、アムール河の海に注ぐ河口もかすか見えた。それで樺太は島に違いない。それでも行くか」と言った。林蔵の願いが通じ、翌日、2漕の舟で、ラッカまで行き林蔵も樺太が島であることを確認、「大日本国国境」の標柱を建て、文化6年6月（1809）宗谷に戻った。ラッカ、シラヌシ（白玉）間の距離は約633kmであった。



赤字第1回、
青字第2回経路



現在のラッカ 対岸が見える。



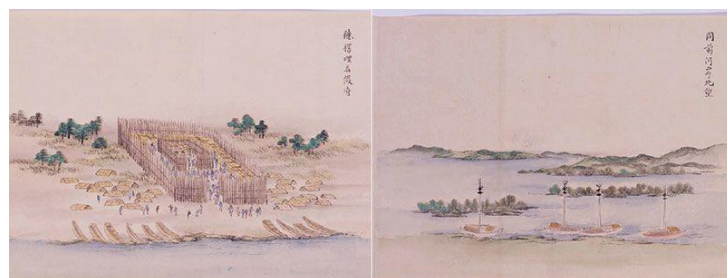
北端のナニオー：間宮林蔵画

1809年（文化6）：30歳、願いが通じ再び樺太探検を命ぜられた。やっと6人のアイヌを雇い、8月、ト>NNAI（真岡）から舟で海岸沿いに北上、途中、野蛮な山丹人に数回出会い、帰りたいたいという従者もいたので已む無く、ウトンニという所で北行きを断念。ト>NNAIに戻った。

1月29日、従者ラロニ以下、6人と再度出発。前回撤退し荷物を預けておいたウトンニに着いたが5人が先は危険だから行かないという。邑長が5人を集めてくれ、3月上旬、北へ向けて出発。野宿を重ね4月9日、ノテト（前回、松田伝十郎と出会った地点）に至った。ノテト（ギリヤーク人集落）の邑長コニーと共に山丹船で5月8日ノテトを出帆してラッカの先、北緯53度のナニオーに着き、樺太が離島であることを再確認した。林蔵はその先、北端まで進み東海岸を南下して出発地のシラヌシに戻りたい。せめて東海岸まで行きたいと言ったが、従者達が野蛮な山丹人が居て危険だと反対しノテトに戻った。コニーは清国、東韃靼のデレンの役人に毎年この時期、貢物をしていることを話し、デレンに赴くというので同行することとなった。6月26日、コニー等8名が山丹舟（長さ11m、幅1.2m）で東韃靼に向けて出発、ラッカを出て推定3里半、東韃靼の海岸に到着。樺太が離島であることを再確認した。その後、アムール河を遡りデレンに到着。清国の役人と会い、樺太が島であること、ロシアの勢力が及んでいないことを知り、間宮海峡と命名する。デレンよりの帰途、アムール河の本流を下り、ロシアが極東地域を必ずしも支配しておらず、清国人が多くいる状況を確認した。



デレンで清朝役人に接待される林蔵



柵に囲まれたデレンの清国臨時出張所と遠景 林蔵画



1809 年（文化 6）9 月末：林蔵は宗谷に戻り、11 月、松前奉行所に出頭し帰着報告し、松前で樺太探査の結果報告の作成に取り掛かった。師の村上島之丞の養子である村上貞助に口述を筆記させ「北蝦夷島地図」「北蝦夷地分界余話」「東韃靼地方紀行」を表し、地図とともに幕府に提出した。（左図）

1812 年（文化 9）：33 歳、伊能忠敬（67 歳）邸に出入りし、測量技能の向上に努めた。

1814 年（文化 11）：35 歳、再び蝦夷地の内部を測量

1822 年（文政 5）：43 歳、松前藩奉行が廃止され江戸に帰り普請役となる。

1828 年（文政 11）：49 歳、勘定奉行村垣定行の部下となり、幕府の隠密として各地を調査、以後、謎が多い。

1832 年（天保 3）：53 歳、シーボルト著「日本」で日本境界略図に間宮海峡の名を始めてヨーロッパに紹介。（左図）

1844 年（天保 15）：65 歳、江戸本所外手町の寓居にて死す。生涯独身、人生後半は不遇であった。

付：日ロの国境をめぐる推移：

明治 8 年（1875）：「千島・樺太交換条約」、日本は樺太の領有権とウルップ島以北の千島列島（北千島）と交換、千島列島全体を領土とした。

明治 38 年（1905）：日ロ戦争の結果、ポーツマツ条約により樺太の中央部の北緯 50 度線が日ロの国境線となった。

昭和 20 年 8 月 15 日（1945）：日本、ポツダム宣言を受諾し終戦となるが、ソ連は戦争を続行し、9 月 15 日までに南樺太と千島列島・北方領土を占領、それ以降、実効支配。1956 年、日ソ共同宣言により国交を再開したが、平和条約および国境画定条約は締結されていない。

終戦時、南樺太居住の日本人は約 40 万人。（Wikipedia）



日ロ国境 50 度線国境標石



王子の池の石碑（斎藤毅氏撮影）

ユジノサハリンスク（旧豊原）博物館所蔵（4 柱のうち 1 本）（斎藤毅氏撮影）

斎藤毅さんは筆者の小中高時代からの友人、百名山踏破、還暦記念にキリマンジャロ、古希記念にモンブラン、マッターホルンを現地ガイドと登攀。サハリンにはカムチャッカへの中継地として立ち寄ったという。

参考文献：「東韃地方紀行」（東洋文庫） Wikipedia 写真のうち、出所が明記されていないものは、無料画像によりました。



旧王子製紙工場風景

現在、5 工場跡が残されている。